

上条 報告

第16号
平成22年9月

甲州市教育委員会
☎32-5097

笛吹市芦川町伝統的建造物群

保存対策調査報告書

『芦川く兜造民家と石垣の風景』



笛吹市では同市の旧芦川村地域について、伝統的建造物群保存地区の選定を目指し、「笛吹市芦川町伝統的建造物群保存対策調査委員会」を組織し、平成二十年、二十一年の二ヶ年にわたり、芦川に沿って形成された集落―上芦川・新井原・中芦川・鶯宿―の調査を実施しました。

旧芦川村は、過疎化が進んでいますが県内で最も多くの茅葺民家が残されている地域として知られています。今号は、『報告書』の内容から、笛吹市芦川町の様子を見てみたいと思います。

【笛吹市芦川町の概要】

笛吹市芦川町はもと東八代郡芦川村です。平成の大合併により東八代郡内の四町四村（芦川村・石和町・御坂町・一宮町・八代町・境川村・中道町・豊富村）のうち、芦川村・中道町・豊富村を除く五町村に、東山梨郡から春日居町が加わり、平成十六年十月に笛吹市が誕生しました。その後中道町は甲府市と合併、豊富村は中巨摩郡田富町と玉穂町と合併し中央市となりましたが、芦川村は平成十八年八月に笛吹市と合併しました。

清流の芦川に沿って開けた村ですが、大きくは上記の四集落で成り立ちます。

芦川はほぼ西進し、旧上九一色村（現甲府市）、市川三郷町を流れ、笛吹川に合流します。上流域にはスズランの群生地があり、花の咲く六月頃には多くの観光客が訪れます。また、最近「大石トンネル」が開通し、河口湖まで至近となりました。ご利用になった方も多いいと思います。

茅葺の兜造民家群が多く残されているということは、上条集落と同様に、かつての主産業は養蚕であったことを示します。ですが養蚕は昭和五十五年以降はほとんど姿を消したといい、それに替わって広がったのがコンニャク栽培でした。

芦川町の農地は一二五ヘクタール強ですが、そのうち水田は八ヘクタールしかありません。また、水田以外の農地は大半が傾斜地であり、耕作に適する土地ではありませんでした。そのため炭焼きや養蚕に頼っていた時代が長く続きました。現在では、水田は多少の広がりを見せており、農地ではハウレンソウ・ニンジン・パセリ・トマト・カリフラワーなどの高冷地野菜、特にハウレンソウが栽培されています。

【民家の特徴】

芦川町の茅葺民家の特徴は、何ととっても「兜造」という形状にあります。兜造とは寄棟（または入母屋）の妻側（両側面）を切り上げたもので、あるいは屋根の妻側に大きな開口部を設けたもので、妻側の開口部の上に、庇状の屋根がかかっているように見えます。寄棟と入母屋をベースとした兜造の構造には大きな違いはなく、屋根の頂部に乗る棟木の長さにより、寄棟型か入母屋型か分類できるとのことです。芦川町では、寄棟型が多いことが判明しました。左上の写真は、最も多い寄棟型の兜造です。

また、片面だけ兜造という場合も比較的多く、左下の写真は片面兜造、片面寄棟造という例です。



調査では、上芦川地区で三十七軒、新井原地区で十五軒、中芦川地区で四十四軒、鶯宿地区で六十軒の合計百五十六軒の茅葺民家が確認されました。兜造の主屋とともに、集落の景観を特徴付けている土蔵も九十二棟確認できました。

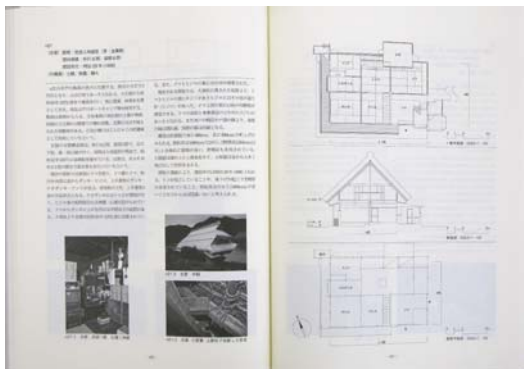
上条集落の民家に顕著な突き上げ屋根については二十六棟しかありませんでした。一棟しかない地区と、四割の主屋に付いている地区と、四地区の差が著しく現れており、興味深い傾向でした。

兜造民家は、峡東地域の切妻造民家と同じように、

養蚕のために発達した民家形態です。切妻造民家の突き上げ屋根に相当するものが、兜造民家では妻側の開口部となります。「養蚕に風は必要だが光は必要ない」との考えから、正面にわざわざ突き上げ屋根を設けなかったものと思われまます。切妻造民家の突き上げ屋根は、養蚕の増加に伴い十八世紀後半頃に付加され、十九世紀に入ると広く普及しました。兜屋根への切り替えも、この頃なのかも知れません。

兜造以前は、寄棟造や入母屋造であった可能性が指摘されています。最も古い民家では、峡東の切妻造民家の古例と同じ「四つ建」の構造がみられ、国中地域の民家の影響を受けて建てられたものの、養蚕の発達に伴い、郡内地域に広く分布する兜造の屋根に改造した様子がわかります。

切妻型の兜造民家は、数例しかありません。詳細な調査の結果、改造の痕跡が認められるため、もとは寄棟造か入母屋造だったものを、改造により外観を峡東地域の切妻造民家に似せたものと考えられ、報告書では「寄棟型・入母屋型の兜造が定着した後に、切妻型の兜造が増加したとみるべき」としています。



【集落を構成する文化的景観】

●石垣

芦川町を語る上で欠くことのできない景観があります。それは、「石垣」です。

傾斜地で耕作するには、段上の畑を作る必要があります。そのために石垣は不可欠です。芦川町の石垣は、集落内のどこでも目にはいる風景で、小口の石ばかりを積んだもの、比較的大きな石を使っているものなど、多種多様な積み方がみられます。河原の石ではなく山からの転石を使っており、山里の情緒を醸し出しています。民家に近い石垣は、強度をとるためコンクリートで固めているものもありますが、その多くは空積みで、技術の高さも推し量れます。

石垣には、左下の写真にあるような貯蔵庫を設けているものもあり、豊かな石垣の文化が感じられます。



●芦川と橋

芦川町に源流を發する芦川は、市川三郷町で笛吹川に合流します。長い河川ではありませんが、その間ほとんど水を濁すことなく流れる、まさに清流です。

芦川町内の芦川の流れは、上流部にしては割と穏やかです。川幅が狭いことと、堤防がしっかりしているせいでしょうか。



芦川に架かる橋の多くは、丸太（あるいは電柱）を渡し、その上に板を打ち付けただけの橋です。交通のためではなく、対岸の畑や山へ行くためのもので、歩行者のための手摺すら付けられていません。大雨で流されるたびに架け直したものでしょうが、なんとものどかな風景です。



芦川町は過疎が深刻で、人口五百二十二人、二百三十八世帯（二十一年五月）を数えます。河口湖へ抜ける大石トンネルの開通により、一時的な活気がみられました。が、伝建への取り組みにより交流人口が増え、恒久的な活気の復活が期待されています。

甲州市からは車で一時間程度です。見学会や交流会などを企画しながら、お互いの刺激になればと思います。